



— 口腔機能低下症の診療を実施している医院の事例を紹介します —

「口腔機能低下症」は、う蝕や歯の喪失など従来の器質的な障害とは異なり、いくつかの口腔機能の低下による複合要因によって現れる病態。7つの下位症状のうち3項目以上該当する場合に「口腔機能低下症」と診断されます。詳細は日本歯科医学会発信の「口腔機能低下症に関する基本的な考え方」をご参照ください。

▶ 口腔機能管理としての機能訓練を実施 予防を見据えた口腔機能の 評価と実践を入れるべき時代

これから注目され、求められるクリニックは口腔機能の維持・向上に熱心なクリニックだと思います。

Point! 口腔機能リハビリテーションが低栄養予防につながる。



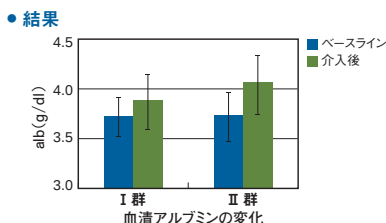
米山歯科クリニック
(静岡県長泉町)
院長 米山 武義 先生

これまで我々は、口腔機能を改善するための補綴的診療に多くの時間を費やしてきました。一方で口腔機能の評価やその向上(低下予防)のための訓練や、リハビリテーションの実践はあまりしてきませんでした。しかし我が国の高齢化は急峻であり、オーラルフレイルや口腔機能低下症の方々が急増しつつあります。口から安全に食べられないことがどんなに辛いのか、これまで多くの要介護高齢者の方々を見てきて気づかされました。近未来を見据えた歯科診療所の機能の一つに、予防を見据えた口腔機能の評価と実践を取り入れるべき時代が来たと思います。

食支援と口腔機能向上の効果

(菊谷ら, 2005)

- **対象・方法**
介護老人保健施設入所者で軽度の低栄養状態を示した者を以下の2群に分け、2ヵ月間の介入を行ったのち評価を行った。
・I群: 食支援群
低栄養に対する問題点の提示と食事の環境整備
・II群: 食支援+口腔機能向上訓練群
低栄養に対する問題点の提示と食事の環境整備
嚥下機能に対する間接機能訓練(週2回、20分程度)



- **結論**
口腔機能向上を目的とした介入(口腔機能プログラム)は食支援単独と比較し、さらに栄養改善に寄与することが示唆された。

【出典】菊谷武, 米山武義, 手嶋登志子, 堀内ふき, 宮武光吉, 足立三枝子, 石田光広, 西脇恵子, 田中甲子: 口腔機能訓練と食支援が高齢者の栄養改善に与える効果, 老年歯学 (20), 208-213, 2005



作成: 米山武義先生、杉山聡子歯科衛生士

Point! メニューの中から、患者さんの状態に合わせた組み合わせを!

症例



患者: 93歳 男性

体調不良を主訴に内科を受診、内科医から歯科受診(本院)を勧められ受診。

主訴: 唾液がたくさん出てくる。痰が混じる。1年前から味を感じなくて食欲が出ない。口の中で苦みを感じる。

状況: 流唾と唾液の貯留が認められ唾液の飲み込みが出来ていない様子。3ヵ月で7kgの体重減少(150cm 51kg BMI22.6)。義歯が欠損部の一部にしかない。

リハビリ: 欠損部位に義歯を作製後リハビリを開始。93歳という年齢のため、過度な期待やリハビリ内容が過剰にならないよう、状況確認を行いながら無理のない内容で進めることとした。

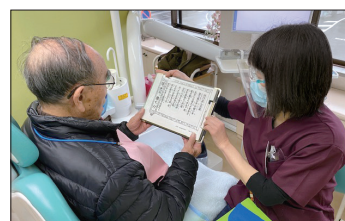
管理指導: 自宅で毎日エアロバイクを20分やっているの、その前に準備運動を兼ねて首周囲のストレッチを提案。TVを見ながら舌を前後左右に動かす運動も提案。

〈1年3ヵ月後〉

右表に示すよう舌口唇運動は現状維持、舌圧は改善し、本人の初診時の主訴は全て改善できた。93歳という年齢でどれだけの改善が望めるのか未知数であったがメンテナンスも欠かさず来院され、リハビリをきっちり行っていた。口腔機能の改善は安全な歯周治療にも反映するため、メンテナンスも楽になり、時間が短縮できる分を口腔リハビリに費やせた。

Point! 回数ではなく「もう一歩頑張るくらい」と指導。

発声練習と早口言葉の訓練▶



	義歯新製後	3ヵ月後	9ヵ月後
舌口唇運動機能(回/秒)			
pa	5.2	5.0	5.4
ta	5.6	4.4	5.6
ka	2.4	2.6	2.2
舌圧(kPa)	14.8	18.1	22.1
リハビリ	・首と舌の前後左右に動かす運動 ・あいうべ体操	・首の運動の継続 ・あいうべ体操 ・タッピング	・首の運動の継続 ・あいうべ体操 ・タッピング
状況	食事がしやすくなり餅も食べられる。ヌメヌメ感がまだある。	食事がしやすくなり唾液の飲み込みが出来るようになった。痰はまだ混じる。	痰が起床時に感じるくらいになった。味覚も分かるので食欲もある。体重2kg増加。

患者さんが、ぼろっとこぼす愚痴のような話(「最近食事中むせるんだよね」「唾液が奥にたまってしまう」「美味しいと感じなくて食欲が無い」等)から、『口の中の働きを客観的に数値化して調べる検査がありますけどやってみませんか』とお伝えすると、検査に前向きな返事をいただけます。検査はオーラルディアドコネシスから始めると、患者さんが楽しそうにやってみるのでおすすめです。はじめに術者が行って見せると分かりやすく、恥ずかしさも半減する(?)のか素直にやってみただけです。「か」はたいへんだったよ〜」など、自分自身で結果を感じるから興味につながるの、他の検査もスムーズになります。(歯科衛生士 井村典子さん)

※2022年2月現在の情報です。

